



上海交通大学硕士学位论文

上海交通大学学位论文
L^AT_EX 模板示例文档

姓 名: 某 某
学 号: 0010900990
导 师: 某某教授
院 系: 某某系
学 科/专 业: 某某专业
申 请 学 位: 工学硕士

2023 年 3 月 29 日

A Dissertation Submitted to
Shanghai Jiao Tong University for Master Degree

A SAMPLE DOCUMENT
FOR L^AT_EX-BASED SJTU THESIS TEMPLATE

Author: Mo Mo
Supervisor: Prof. Mou Mou

School of XXX
Shanghai Jiao Tong University
Shanghai, P.R. China
March 29th, 2023

上海交通大学修士学位請求論文

上海交通大学学位論文見本

氏名：某

指導教員：某教授

某カレッジ

上海交通大学

中国・上海

2023 年 3 月 29 日

上海交通大学

学位论文原创性声明

本人郑重声明：所呈交的学位论文，是本人在导师的指导下，独立进行研究工作所取得的成果。除文中已经注明引用的内容外，本论文不包含任何其他个人或集体已经发表或撰写过的作品成果。对本文的研究做出重要贡献的个人和集体，均已在文中以明确方式标明。本人完全知晓本声明的法律后果由本人承担。

学位论文作者签名：

日期： 年 月 日

上海交通大学

学位论文使用授权书

本人同意学校保留并向国家有关部门或机构送交论文的复印件和电子版，允许论文被查阅和借阅。

本学位论文属于：

☐ 公开论文

☐ 内部论文，保密 ☐ 1 年 / ☐ 2 年 / ☐ 3 年，过保密期后适用本授权书。

☐ 秘密论文，保密 ____ 年（不超过 10 年），过保密期后适用本授权书。

☐ 机密论文，保密 ____ 年（不超过 20 年），过保密期后适用本授权书。

（请在以上方框内选择打“√”）

学位论文作者签名：

指导教师签名：

日期： 年 月 日

日期： 年 月 日

摘 要

学位论文是本科生从事科研工作的成果的主要表现，集中表明了作者在研究工作中获得的新的发明、理论或见解，也是科研领域中的重要文献资料和社会的宝贵财富。

为了提高本科生学位论文的质量，做到学位论文在内容和格式上的规范化与统一化，特制作本模板。

关键词：学位论文，论文格式，规范化，模板

ABSTRACT

As a primary means of demonstrating research findings for undergraduate students, dissertation is a systematic and standardized record of the new inventions, theories or insights obtained by the author in the research work. It can not only function as an important reference when students pursue further studies, but also contribute to scientific research and social development.

This template is therefore made to improve the quality of undergraduates' dissertation and to further standardize it both in content and in format.

Key words: dissertation, dissertation format, standardization, template

要 旨

学位論文は大学生が科学研究の成果をアピールする主要な形式である。研究の中で得られた新しい発明や理論、見解を集中的に示すもので、研究分野における重要な文献資料及び社会の貴重な財産ともなる。

学生の学位論文の品質を高め、学位論文の内容や形式上の規範化及び統一化を実現するために、本見本を制作することに至った。

キーワード：学位論文 論文書式 規範化 見本

目 次

第一章 序論	1
1.1 前書き	1
1.2 本研究の主要内容	1
1.3 本研究の意義	1
1.4 先行研究	1
第二章 正文の文字書式	3
2.1 論文の正文	3
2.2 字数要求	3
2.2.1 学士論文の要求	3
2.3 本章のまとめ	3
第三章 図表、公式の書式	5
3.1 図表の書式	5
3.2 公式の書式	6
3.3 コード環境	6
3.4 アルゴリズム環境	7
3.5 本章のまとめ	7
第四章 結論	9
4.1 主要結論	9
4.2 今後の展望	9
付録 A 記号表	13
研究業績書	15
謝 辞	17

图目录

图 3-1 例 5

表目次

表 3-1 実験データ 5

第一章 序論

1.1 前書き

山路を登りながら、こう考えた。

1.2 本研究の主要内容

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。

1.3 本研究の意義

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。

1.4 先行研究

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。

第二章 正文の文字書式

2.1 論文の正文

論文の正文が主体で、一般的に標題、叙述、図、表、公式などからなる。理論分析、計算方法、実験とテスト方法などの方法を用い、...

論文は一般的に十部分の内容から構成される。^{① ⑪ ⑳ ㉔ ㉔}

2.2 字数要求

2.2.1 学士論文の要求

日本語の論文の字数は 12000 字以上で、読書報告書の字数は 15000 字以上となる。

2.3 本章のまとめ

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊とい。

① 脚注 1

⑪ 脚注 11

⑳ 脚注 21

㉔ 脚注 32

㉔ 脚注 50

第三章 図表、公式の書式

3.1 図表の書式

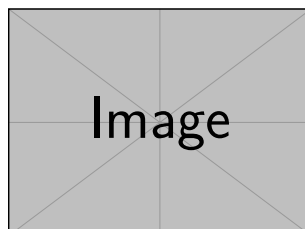


図 3-1 例

表 3-1 実験データ

試験プログラム	A	B	C	D	E	C
	時間 (s)	時間 (s)	時間 (s)	時間 (s)	時間 (s)	資料 (KB)
CG.A.2	23.05	0.002	0.116	0.035	0.589	32491
CG.A.4	15.06	0.003	0.067	0.021	0.351	18211
CG.A.8	13.38	0.004	0.072	0.023	0.210	9890
CG.B.2	867.45	0.002	0.864	0.232	3.256	228562
CG.B.4	501.61	0.003	0.438	0.136	2.075	123862
CG.B.8	384.65	0.004	0.457	0.108	1.235	63777
MG.A.2	112.27	0.002	0.846	0.237	3.930	236473
MG.A.4	59.84	0.003	0.442	0.128	2.070	123875
MG.A.8	31.38	0.003	0.476	0.114	1.041	60627
MG.B.2	526.28	0.002	0.821	0.238	4.176	236635
MG.B.4	280.11	0.003	0.432	0.130	1.706	123793
MG.B.8	148.29	0.003	0.442	0.116	0.893	60600
LU.A.2	2116.54	0.002	0.110	0.030	0.532	28754
LU.A.4	1102.50	0.002	0.069	0.017	0.255	14915
LU.A.8	574.47	0.003	0.067	0.016	0.192	8655
LU.B.2	9712.87	0.002	0.357	0.104	1.734	101975
LU.B.4	4757.80	0.003	0.190	0.056	0.808	53522
LU.B.8	2444.05	0.004	0.222	0.057	0.548	30134
EPA.2	123.81	0.002	0.010	0.003	0.074	1834
EPA.4	61.92	0.003	0.011	0.004	0.073	1743
EPA.8	31.06	0.004	0.017	0.005	0.073	1661

表のつづき 3-1

試験プログラム	A 時間 (s)	B 時間 (s)	C 時間 (s)	D 時間 (s)	E 時間 (s)	C 資料 (KB)
EP.B.2	495.49	0.001	0.009	0.003	0.196	2011
EP.B.4	247.69	0.002	0.012	0.004	0.122	1663
EP.B.8	126.74	0.003	0.017	0.005	0.083	1656
SP.A.2	123.81	0.002	0.010	0.003	0.074	1854
SP.A.4	51.92	0.003	0.011	0.004	0.073	1543
SP.A.8	31.06	0.004	0.017	0.005	0.073	1671
SP.B.2	495.49	0.001	0.009	0.003	0.196	2411
SP.B.4 ^a	247.69	0.002	0.014	0.006	0.152	2653
SP.B.8 ^b	126.74	0.003	0.017	0.005	0.082	1755

^a 脚注^b 脚注

3.2 公式の書式

$$\frac{1}{\mu} \nabla^2 \mathbf{A} - j\omega\sigma \mathbf{A} - \nabla \left(\frac{1}{\mu} \right) \times (\nabla \times \mathbf{A}) + \mathbf{J}_0 = 0 \quad (3-1)$$

$$\int_a^b f(x) dx = \lim_{|P| \rightarrow 0} \sum_{i=1}^n f(\xi_i) \Delta x_i \quad (3-2)$$

3.3 コード環境

```
#include <stdio.h>
#include <unistd.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/wait.h>

int main() {
    pid_t pid;

    switch ((pid = fork())) {
    case -1:
        printf("fork failed\n");
        break;
    case 0:
        /* child calls exec */
        execl("/bin/ls", "ls", "-l", (char*)0);
```

```

    printf("execl failed\n");
    break;
default:
    /* parent uses wait to suspend execution until child finishes */
    wait((int*)0);
    printf("is completed\n");
    break;
}
return 0;
}

```

3.4 アルゴリズム環境

アルゴリズム 3-1 アルゴリズム例

Data: this text

Result: how to write algorithm with $\text{\LaTeX 2}_{\epsilon}$

```

1 initialization;
2 while not at end of this document do
3     read current;
4     if understand then
5         go to next section;
6         current section becomes this one;
7     else
8         go back to the beginning of current section;
9     end
10 end

```

3.5 本章のまとめ

住みにくき世から、住みにくき煩いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云えば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも瑇瑁の音は胸裏に起る。丹青は画架に向って塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に映る。ただおのが住む世を、かく観じ得て、靈台方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうららかに収め得れば足る。この故に無声の詩人には一句なく、無色の画家には尺縑なきも、かく人世を観じ得るの点において、かく煩悩を解脱するの点において、かく清浄界に出入し得るの点において、またこの不同不二の乾坤

を建立し得るの点において、我利私慾の羈絆を掃蕩するの点において、 千金の子よりも、万乗の君よりも、あらゆる俗界の寵児よりも幸福である。

第四章 結論

4.1 主要結論

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知った。二十五年にして明暗は表裏のごとく、日のあたる所にはきつと影がさすと悟った。三十の今日はどう思っている。喜びの深きとき憂いよいよ深く、楽みの大いなるほど苦しみも大きい。これを切り放そうとすると身が持てぬ。片づけようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寝る間も心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえって恋しかろ。閣僚の肩は数百万人の足を支えている。背中には重い天下がおぶさっている。うまい物も食わねば惜しい。少し食えば飽き足らぬ。存分食えばあとが不愉快だ。……

4.2 今後の展望

余の考がここまで漂流して来た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損くなくなった。平衡を保つために、すわやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺ほどな岩の上に卸りた。肩にかけた絵の具箱が腋の下から躍り出ただけで、幸いと何の事もなかった。

参考文献

- (1) 大内田鶴子「草の根の自治の技術」『社会学評論』1999(4), 513-530
- (2) K・J・アロー 長名寛明訳『社会的選択と個人的評価』日本経済新聞社 1977, 94
- (3) 鈴木光男・武藤滋夫『協力ゲームの理論』東京大学出版会 1985, 149
- (4) 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波書店 1973
- (5) 船橋晴俊「環境問題の未来と社会変動 社会の自己破壊性と自己組織性」船橋晴俊・飯島伸子編『講座社会学 12 環境』東京大学出版会 1998, 191-224
- (6) 真田信治他『社会言語学』おうふう 1992
- (7) 真木悠介『現代社会の存立構造』筑摩書房 1977a
- (8) ——『気流の鳴る音』筑摩書房 1977b
- (9) 横山紀子「インプットの効果を高める教室活動：日本語教育における実践」国際交流基金『日本語国際センター紀要』第 10 号 1999, 37-53
- (10) <http://www.ninjal.ac.jp/> (国立国語研究所) (作成日時、更新日時、アクセス日時)

付録 A 記号表

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率

μ 透過性

ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性 ϵ 誘電率 μ 透過性

研究業績書

學術論文

- (1) Chen H, Chan C T. Acoustic cloaking in three dimensions using acoustic metamaterials[J]. Applied Physics Letters, 2007, 91:183518.
- (2) Chen H, Wu B I, Zhang B, et al. Electromagnetic Wave Interactions with a Metamaterial Cloak[J]. Physical Review Letters, 2007, 99(6):63903.

特許

- (3) 発明者, “永久機関”, No. 202510149890.0

謝 辞

立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せたような峰が聳えている。杉か檜か分からないが根元から頂きまでことごとく蒼黒い中に、山桜が薄赤くだんだんに棚引いて、続き目が確と見えぬくらい靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去ったか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めている。天辺に一本見えるのは赤松だろう。枝の間の空さえ判然している。行く手は二丁ほどで切れているが、高い所から赤い毛布が動いて来るのを見ると、登ればあすこへ出るのだろう。路はすこぶる難義だ。

土をならすだけならさほど手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平らにしても石は平らにならぬ。石は切り碎いても、岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙って、吾らのために道を譲る景色はない。向うで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならぬ。巖のない所でさえ歩るきよくはない。左右が高くって、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿って、その頂点が真中を貫いていると評してもよい。路を行くと云わんより川底を涉ると云う方が適當だ。固より急ぐ旅でないから、ぶらぶらと七曲りへかかる。

A SAMPLE DOCUMENT FOR L^AT_EX-BASED SJTU THESIS TEMPLATE

Sed feugiat. Cum sociis natoque penatibus et magnis dis parturient montes, nascetur ridiculus mus. Ut pellentesque augue sed urna. Vestibulum diam eros, fringilla et, consectetur eu, nonummy id, sapien. Nullam at lectus. In sagittis ultrices mauris. Curabitur malesuada erat sit amet massa. Fusce blandit. Aliquam erat volutpat. Aliquam euismod. Aenean vel lectus. Nunc imperdiet justo nec dolor.